

## 1 はじめに

多くの自治体では、2021年度からGIGAスクール構想による情報端末の活用が始まりました。ここ数年の全国学力・学習状況調査の質問調査の結果を見ると、授業での情報端末の活用について、先生方の取り組みの成果が表れてきています。2024年2月に開催された全公教の中央研修大会・シンポジウムのテーマは、「教育DXの推進と副校長・教頭の役割」。全公教として、情報端末の単なる活用からさらに前進しようという強い意思を感じます。本稿の読者には、新任の副校長・教頭先生もいらつしやると思いますが、このシンポジウムやこれまでの全公教の勉強会の内容を参考にしながら、教育DXを組織的・効率的に進める手立てや副校長・教頭先生の役割を考えていきます。

## 2 校務をデジタル化する「DXのはじめの一步」

シンポジウム開催の少し前2023年12月末に文部科学省より「GIGAスクール構想の下での校務DX化チェックリストに基づく自己点検結果」（以下、チェックリスト）の速報値が公表されました。

各校がまず確認するべきは、「学校内の連絡のデジタル化」です。例えば、職員会議等の資料のペーパーレス化は、「完全にデジタル化している」「一部している（半分以上）」を合わせて67.3%と取り組みやすさが表れています。一方で、「教員と保護者間の連絡のデジタル化」について、配布文書のデジタル化は32.9%、回収文書のデジタル化は8.9%とハードルの高さがうかがえます。

シンポジウムにおいて、徳島県の土井教頭先生の学校では、個人懇談の日程調整について、教員が紙で回収し、スケジュールリングして日程表を作成する従来の方法から、教員が日程表に同時協働編集で入力する方法、そして、カレンダーの予約機能を使って保護者が直接入力する方法、と段階的に改善したこと等、仕組みが仕事の仕方を変えることが報告されました。「教員と保護者間の連絡のデジタル化」には保護者の理解と協力が必要であるため、二の足を踏む学校もあるかもしれません。保護者との調整については、佐野浩志先生の書籍『期待される学校のバランス・マネジメント』（東洋館出版社）が参考になります。

「校務のデジタル化はDXとは言えない」という声もありますが、教

# 「教育DXを組織的・効率的にすすめる手立て」副校長・教頭の役割

神奈川工科大学情報教育研究センター 准教授 中尾 教子



員の有限な時間を有効活用するために、デジタルを使って効率化できる部分は効率化することが、今日の校務の整理には求められます。文部科学省「全国の学校における働き方改革事例集」も参考にして、取り組みそうなことを夏休みまでにピックアップすることをおすすめします。

## 3 研修をDXする「教員の学びと子供の学びは相似形」

東京学芸大学の髙橋純先生（全公教2023年度第1回全国研究部長会講演）、春日井市教育委員会の水谷年孝先生（同第2回講演）のお二人から、しばしばお聞きする言葉が「教員の学びと子供の学びは相似形」です。後述の答申にも同様の表現が出てきます。

やはり体験したことのない授業を実施することには不安がつきまといま。情報端末とクラウドを教員自身の学習環境として活用し、子供と同様に探究の過程を意識した学びを体験します。方法は様々ですが、例えば、研修の目標と過程（学習課題と学習過程）をあらかじめクラウド上に共有し、事前に自身の都合のよい時間や場所で動画を見たり、実際の授業を見たり、その場で体験したりしたうえで、自分の考えをクラウドのツールに書き込みます。研修の参加者はお互いに他の参加者の考えを見ることができ、意見の交流もしやすくなります。

中教審答申『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成、採用、研修等の在り方について』において、「新たな教師の学びの姿」として「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶ主体的な姿勢」「求められる知識技能が変わっていく

ことを意識した継続的な学び」「一人一人の教師の個性に即した個別最適な学び」「他者との対話や振り返りの機会を確保した協働的な学び」が示されています。子供と同じで、教員自身の学び姿勢を外から変えようとしてもなかなか難しいかもしれません。ですが、学び方や学ぶ仕組みを変えることは学ぶ姿勢を変えるよりも簡単にはず

今回のシンポジウムで登壇者の主張



教員の学び方や学ぶ仕組みを変える

に共通していたものは、このようにGIGAスクール構想で整備された環境を、校務でも研修でも教員同士でフル活用するということです。

#### 4 授業をDXする 「令和の教室」

「はじめに」に書いたように、情報端末の活用は進んでいます。一方で、ここ数年の全国学力・学習状況調査の児童生徒質問調査の結果を見ると、「5年生まで（中学1、2年生のとき）に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という設問については、児童生徒共に「当てはまる」は30%前後と、この3年間で大きな変化はありません。

中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では「一人一人の子供を主語にする」学校教育の目指すべき姿が描かれています。これからは、正解がない時代に自ら考え、自ら学ぶ人材を育成するのです。多くの先生方が挑戦しているのは、「一人一人の子供を主語にする」授業です。一人でも、大人になっても学び続けられるよう、学び方を教え、情報活用能力を育成しながら、学習課題や学習過程、学習形態について、子供自身が選択できる幅を徐々に広げています。課題を追究する学習において、作成途中のスライドやドキュメント等、学習過程そのものを子供同士で共有し、お互いに参照しながら学習を進めていきます。違う考えがあるから質問したくなり、似たような考えがあるから相手の意見を確かめたくなるのです。このような授業によって、これまでの一斉指導では学習がしづらかった子供も学習がしやすくなったと聞いています。



クラウド上でも対面でも協働的に学ぶ

このように学習の道具である情報端末とクラウドを使いながら、個別最適な学びと協働的な学びが共存するのが「令和の教室」です。ある学校を訪問した際、管理職の先生が「この教室は令和の教室」とこっそり教えてくれました。皆さんは自校の中で、どこが「令和の教室」なのか、把握していますか。

### 〈連載テーマ②〉

## 教育DXの推進



#### 5 みんなで取り組む「一人の100歩より100人の1歩」

シンポジウムでは沖縄県教育庁の大城先生が、堀田龍也先生（東京学芸大学教授）の言葉「一人の100歩より100人の1歩」をベースにDXに取り組んでいると報告されました。いろいろな子供がいるように、いろいろな教員がいます。前段に出てきた「この教室は令和の教室」という言葉は、暗に「平成の教室」や「昭和の教室」の存在を感じさせます。授業のDXとなると、教員からすれば授業の形だけでなく、授業観にまで立ち入られるようで、教員の中で拒否反応が起こり、その結果、組織として現状維持に傾いてしまうかもしれません。大切なことはみんなですみずつでも取り組んでいくことです。一方で、先進的にチャレンジしようとする教員を後押しすることも必要かと思えます。

情報端末の活用や授業改善についての先生方のジレンマ、小学校中学校の違いについては、前田康裕先生の書籍『まんがで知るデジタルの学び①②③』（さくら社）に思い当たるエピソードがきつと載っています。

#### 6 おわりに

シンポジウムにおいて、コーディネータの中川校長先生は、「GIGAスクール構想」の「GIGA」は「Global and Innovation Gateway for All」、すなわち、「すべての児童生徒にグローバルで革新的な扉を」という意味だが、その扉を先生方にも開けてほしい。」というメッセージを伝えてくださいました。様々な事情からその扉が途轍もなく重いという学校もあるでしょう。ましてや、副校長・教頭先生自身も重い扉になってしまうことだけは避けたいものです。

個人的には、教育DXは、文明開化のように感じています。文明開化では、鉄道やガス灯が設置され、散切り頭が流行し、学制がスタートしました。散切り頭にすれば、それが文明開化だというのはないように、モノや仕組みや文化が変わり、ついには価値観もガラリと変わるようなイメージです。

副校長・教頭先生は、校長を補佐し、職員室の担任とも言われる重要な立場です。大きな目標に常に立ち返り、アンテナ高く情報収集することで、時代の変わり目を敏感に読んで、自校の教員が進むべき方向を照らしてほしいと願っています。